

塩尻の文学

第4号 (郷原宿)

赤羽巖穴・増田小夜・柳宗悦

塩尻が舞台になっている文学作品を紹介します。
文学にふれ、美しい塩尻を見つめてみましょう。

2008年8月10日発行



『乱雲驚涛』

きょうとう

赤羽巖穴

あかはねがんけつ

明治 39（1906）年に執筆された遺稿です。渡米中の思想や、人生観、社会問題への考えが書かれています。

母親の見舞いのためにアメリカから帰郷し、久しぶりに見る、故郷の塩尻や実家のある広丘郷原の風景や自然が熱情豊かに表現されています。

入郷記

（二）

何時とは無しに追懐の夢よりさめて、僕は車上に首を回らした、見れば車は今桔梗ヶ原を通り抜けて小石磊々（らいらい）たる丑道の坂にかゝって居る、車輪一転すると共に眼下に現れる、幾戸の瓦壁、幾糸の人煙、あゝ此れ実に我故郷であるのだ。母在すが故に慕わしとのみ思ひし我故郷も、今まのあたり其の人家を見、其の炊煙を見、其の鎮守の森を見、其の旦那寺の飛鷲を見る時に於て、我胸は宛然（さなが）ら初恋の乙女の如く震（わなな）くのである。（中略）

背後に夕陽の光を浴びつゝ車は我故郷の村に入った。見渡す処我故郷の村は依然たる旧の故郷の村であって、別に此れぞと云う変化は見えぬ、唯遥かに隠顕する我家の門柱のいたく朽損したるを見て、我は一種恥辱の感に打れた。路傍に嬉戯する少年少女は見慣れぬ我が車上の洋服姿を不思議そうに眺めつゝあつた、我は見知らぬ少年少女の数多きを見て、覚えす憮然として流転の歳月のいと永きを顧み思うたが、又心竊に我故郷の村のゼネレーションの盛んなるを祝した。車我家の前に付くと、弟妹等は内より走り出で、車上の我を見てたゞ黙然たるばかりだ、我は車を降りて家に入ると、母上は不自由なる病体を無理に引き立てゝ玄関まで出迎えられて居た。オー慈愛なる母上よ、我が不孝狂愚の罪を許させ給えと我は心に詫びた、而していたくも変らせられたる御姿を拝して、我は只だ不覚の暗涙に咽（むせ）ぶのみであつた。

故郷の川

（二）

我が郷には昔から、毎年九月十五日の鎮守祭の前になると、村中で此の奈良井川を乾して其の魚を漁って祭礼の御肴にすると云う古い習慣がある、此の川乾（ほし）たるや実に趣味のある面白い遊漁で、村の少年の血を沸かしむる事甚しく、皆川乾（ほし）と称して年中行事の最も愉快なるものゝ一として正月から楽しんで待つて居る位のものだ。僕杯も少年時代には矢張り待つて居る連中の一であつた、最も僕の少年時代には単に川乾（ほし）時ばかりでは無く、殆ど年中暇ある毎には奈良井川にぶらぶらして居たので、或る村人からは河童と云う結構なる借名さえ頂戴して居た位だ。（中略）



赤羽巖穴

社会主義運動者。本名は一。塩尻市広丘郷原生まれ。(1875-1912)。中央大学卒業後、神戸・日刊時事新聞「神戸新聞」の記者になります。『嗚呼祖国』の出版後、渡米。在米日本人経営新聞社「新世界」へ入社。帰国後『乱雲驚涛』を執筆。

社会主義の新聞に多くの論説を発表。「東京社会新聞」(社会党入獄史)の記事の署名者として捕えられます。その後『農民の福音』の出版、発売禁止となり再び捕えられます。幸徳秋水や木下尚江等と親交がありました。



MEMO

ひと・赤羽 一

資料：「明治の人間像」藤田美実

赤羽一の幼い時からの友人の、赤羽君十翁の話が載っていました。当時92歳、翌年逝去されたそうです。

「一(いち)君は、正しい、正直な人でした」「一君は社会主義者にならなければ、日本に生きてゆけなかったでしょう」

半世紀以上も前の一からの手紙やはがきを、大切にもっておられ、信頼と友情を失わないでおられたそうです。

まち・郷原宿

文政4(1821)年、安政5(1858)年の大火で郷原宿はほとんど全焼します。今ある古い家も藩のあっせんで2~3両の借入金をし、新築や古家を移築したものが多いいわれています。

明治35(1902)年、篠ノ井線が開通し、宿場町郷原の様相が変化します。旅館業を営んでいた人々は、農業に戻りました。

『農民の福音』では「自然の恩恵物である土地は人類共有物でなければならぬ」とあり、郷原のことを「120戸のうち人から金も借りず小作もせず、独立して生活できる家は2軒しかない」と書かれています。

『芸者 苦闘の半生涯』 増田小夜

父なし子で、生まれてすぐに叔父に引き取られ、5歳の時に郷原の地主の家で子守として働き、12歳で上諏訪の芸者屋に売られます。一人前になり見受けされますが、幸せは感じられませんでした。

子守りをしている時の、郷原の風景

叱られて大きな栗の木にしばられました。栗の木にいる、毛虫がからだに何匹も這ってきて泣いてしまいました。

朝5時に起こされ、川におしめの洗濯へ行きます。川は、食器を洗う川と洗濯の川とが別になっていました。その後、掃除をして朝飯になり、それから子守になります。

夏はウリ畑に入って盗み食いをしました。しかし、赤ん坊の便に畑の近くの桑の葉が混ざっていたことで、ばれてしまい叱られました。

屋敷のクルミや栗の実をひろい、ひみつの場所にたくわえ、冬にこっそり食べて楽しみました。

芸者の世界を捨て、弟と暮らし始めた塩尻での生活

2年前の台風で家がつぶされ、叔父は亡くなっていました。叔母は、小屋に住んでいました。部屋といっても一間きりです。

お昼の弁当にゆで芋を食べますが、付ける塩がありません。夕食はやきもちと言って、都会のうどん粉のように白くない、皮のついたままの麦をひいた粉をまるめて、囲炉裏の灰で焼き、ぼんぼん叩きながら灰を吹き吹き食べます。

おばが「一番ご馳走」と言って出してくれたのは、大根を輪切りにしたもので、塩も醤油も無く、梅酢につけてありました。



増田小夜

芸者。塩尻市生まれ。(1925-2008)。28歳で自分史を書きます。ラジオ放送等、反響を呼んだそうです。臼井吉見も絶賛しました。

『文化財「郷原の宿」』 柳宗悦

柳宗悦一行は幾度か郷原宿を視察に来ています。昭和35年、米国パレス美術館副館長ウィレス夫人を伴って来た時に、この文章を松本市（当時郷原は東筑摩郡）の観光課へ送りました。その後、宗悦の紹介で文化財保護委員会に関係を持つ、東京大学・関野克博士、藤島亥次郎博士等も調査に来たそうです。

聳える山々の姿を心に浮かべて多くの人々が信州の松本に集ってくる。それから河に添い溪に入り、峰へと指して足を運ぶ。誰も自然の偉容に心を惹かれて来るのである。だがその殆んど誰もがこの町に近い人文の跡を訪ねようとしな。松本城は誰も仰いでゆくがそれは遠い歴史への懐古である。もっと手近なもっと今の暮しに繋がる素晴らしい名所があるのを誰も知らない。それは町から乗合で僅か二、三十分ほどで行ける『郷原の宿』である。塩尻や洗馬からほんの僅かな道のりである。善光寺街道と呼んだその街道筋にこの宿駅がある。

日本には数多く古い町々村々が残っているが多かれ少なかれどれもこれも今は乱れて、昔の俤を残すものがない。それなのにこの郷原ばかりは殆んど完全なまでに家並が揃っているのである。奇蹟だと言ってもよい程に乱れていない。信州の特色ある建物と言えば所詮『本棟造』である。勾配ゆるやかな大きな切妻造で頂きに見事な雀返がつく、その切妻が正面にあるのが特色である。その本棟造が列をなして両側に並び、横屋造も中にまじるがそれぞれに昔の風を守って様をくずさない。この宿場には明治以降の建物は殆んどない。幕末以来一世紀も火事のない恩沢である。こんな宿場が他にあらうか。

それのみではない、この駅を此の上なく美しくしているのは家々の庭である。街道に面して庭木が植えられ、それが殆んど凡て塀をもたない。だから街道は手入された庭木を並木としてその間を通っているのである。家々の座敷はその街道に面し縁先には大概美しい格子の欄干を設けてある。だからどの家からもお互に美しい場面が見える。家は己の住むものであるが他人が楽しむ家でもあるのである。塀を立てないから庭は往き来する人達の庭なのである。木々は何れも昔風に刈込みをする。こんなにも美しい構造の宿場は他には見かけぬ。それも死んだ過去の様ではない。まだ生活に潤いが見える。多くは農で家の裏に広々と畑を控え、その側に門があるのである。宿場全体が誠に見事な一個の作品だと言ってよい。今まで個々の建物には国宝があり保護すべき建造物として登録された。併し聚落として未だかつてない。正に郷原の宿はその榮譽を受けてよい信州の優れた名所として否、日本の貴重な文化財として、当然公認せられてよい。

松本市の持つ観光の誇りはひとり日本アルプスのみではない。人文の美を語るこの郷原を見過してはならぬ。一つの聚落が国宝になる時があったら、私はどこよりもこの郷原を真先に推したい。県の人、市の人、村の人が自らその価値を自覚する日のあることを望んで止まない。

資料：塩尻市「郷原の宿」

柳宗悦

民芸運動の提唱者。日本民芸館初代館長。（1889～1961）。濱田庄司や河井寛次郎との交流をはかりながら民芸の普及につとめ、日本民芸館を創設。郷原を視察に来た時は、文部省文化財保護委員でした。

▲▼▲ 図書館は友だち・いつでも・どこでも・誰にでも ▲▼▲

レファレンス・サービス（塩尻市立図書館へ調査の依頼をしました。）

Q1. 郷原宿を褒め称えた柳宗悦の文章について。

塩尻市資料「郷原の宿」。本号で掲載しました。

Q2. 増田小夜は今も健在でいらっしゃるのか？

信毎新聞のデータベースで、御悔み欄に掲載されていたのが解りました。

参考資料（塩尻市立図書館でお借りしました。）

- ・「塩尻市誌」
- ・「塩尻市の文化」塩尻市誌第三巻 近代・現代抜粋 塩尻市誌編纂委員会
- ・「明治社会主義文学集（二）」筑摩書房
- ・「明治的人間像」藤田美実 筑摩書房
- ・「芸者 苦闘の半生涯」増田小夜 平凡社
- ・「わたくしたちの塩尻市」塩尻市・塩尻市教育委員会・塩尻市教育会